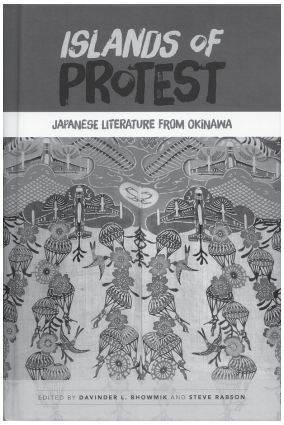
書評

ダビンダー・ボーミック、スティーブ・ラブソン編『抗議する島——沖縄からの日本文学』

Davinder L. Bhowmik and Steve Rabson, ed., *Islands of Protest: Japanese Literature from Okinawa.*

朱　恵足



University of Hawai'i Press, 2016.

沖縄の文学を英語に翻訳することは、どのような言語と文化の越境を意味するのだろうか。一九八九年に、大城立裕「カクテル・パーティ」（一九六七）と東峰夫「沖縄の少年」（一九七〇）と二つの芥川賞受賞作の英訳が、カリフォルニア大学バークレー校の日本研究センターから出版された。[1] その後、二〇〇〇年と二〇一一年に、ハワイ大学から二つの沖縄文学の英訳アンソロジーが出版され、それぞれ近現代の沖縄文学の歩みや、沖縄独特の歴史と豊かな民俗や文化を示すような作品を紹介した。[2] ダビンダー・ボーミック（ワシントン大学）とスティーブ・ラブソン（ブラウン大学名誉教授）が編集した本書は、二〇一六年に同じくハワイ大学から出版されたアンソロジーである。本書では、アメリカで日本の文学や歴史を専門とする教授、研究者や翻訳家たちが、質の高い、文学性豊かな訳文を提供している。だが、沖縄の文学自体がすでに、沖縄の言語、歴史や文化を日本語に翻訳する作業である以上、その英訳は、越境することの可能性と限界を同時に示すことになる。

本章の冒頭を飾るのは、目取真（めどるま）俊の「希望」（一九九九）である。アメリカ人の幼児を殺害した後、一九九五年の少女暴行事件に八万人が集まった抗議の会場に赴き、焼身自殺した「私」の視点から語られる掌編小説である。「私」が新聞社宛に送った犯行声明には、「今オキナワに必要なのは、数千人のデモでもなければ、数万人の集会でもなく、一人のアメリカ人の幼児の死なのだ」と書かれていた。本書の序文は、「希望」の分析から、辺野古における米海軍基地の建設をめぐって、沖縄県と日本政府が対峙するよう

になった経緯を辿る。一九四五年の沖縄戦以来、沖縄に居すわった米軍基地による人権侵害や、それに加担する日本国家の差別や暴力を受けてきた沖縄の「現在」。それを前景に出すことで、沖縄の文学を越境させる同時代の意義が強調される。

「希望」の後に収録されているのは、山城正忠の「九年母」（一九一一）と太田良博の「黒いダイヤ」（一九四九）である。「九年母」は、日清戦争下の沖縄を舞台に、宮崎県出身の小学校の校長が、清国へ軍資金を送ると偽って、清国支持派の老人から金銭を騙し取った話である。校長が下宿している家の息子政一は、日本への同化や国家意識を提唱し、遊女あがりの沖縄人女性を独り占めした校長に反発し、私服の刑事の調査に協力した。「福木、がじまる、蘆薈（アロエ）、棕梠（しゅろ）、檳榔（びんろう）」などの亜熱帯植物に例示されるように、小説には、沖縄の地方色、風土や「支那風情」を表現する漢字語彙がふりがなで日本語に翻訳されている。

太田良博の「黒いダイヤ」（一九四九）は、第二次世界大戦の時、日本軍がインドネシアに設置した「防衛義勇軍」の幹部教育隊で、現地人に日本語を教えたり、マレー語を通訳したりする語り手が、美少年隊員のパニマンに対して抱いたホモセクシュアルな感情を描く。戦後、イギリスの進駐軍であるインドのグルカ兵と地元の青年革命軍とのゲリラ戦において、進駐軍の命令で道路警備をしている語り手は、革命軍に参加したパニマンに再会する。二人の短い対話は、「パニマン（サヤバニマン）です」「やせたね……（ジャディ・クルース・ブカン）」といったように、日本語の翻訳に、カタカナのふりがなでマレー語の音が記されている。革命軍が歌う行進曲も、日本語とマレー語のローマ字表記の二つのバージョンが並列される。それを聞いて語り手が「沈痛な皮肉と哀傷」を感じるのは、「大東亜」民族の団結を掲げてインドネシアを占領した日本が、戦後、白人帝国による地元の民族運動の鎮圧に協力しているからであろう。

この二つの作品は、日本帝国の覇権の始まりとその終わりを象徴する二つの戦争を通して、沖縄人が日本帝国に対して反発や違和感を抱きながらも、セクシュアリティが密接に絡んだ形で、その帝国に組み込まれていくことを表象する。原文では、漢字語彙、沖縄語、マレー語など異質的な民族や言語が、日本語に翻訳され、日本帝国の沖縄統合や「大東亜」民族を構築したプロセスや矛盾を可視化するが、英訳ではそれを表現することができない。

次に続く目取真俊の二つの作品は、戦前から戦後まで沖縄で持続してきた人種／民族、性、階級の重層的な差別を問題化する。「魚群記」（一九八三）は、沖縄人少年マサシの目を通して、季節労働者として沖縄の北部にあるパイン工場に来ている台湾人女工が、その白い皮膚で村の男性たちの欲望を刺激する性的対象として彼らを引き寄せる一方、村の秩序を乱す外来者として忌避されることを描く。その矛盾する態度は、戦前に沖縄が台湾植民地統

治に参与した歴史を連想させ、日本への復帰運動の時代背景に呼応し、日本の人種／民族の序列関係のなかで分裂する沖縄のアイデンティティを垣間見せる。「群蝶の木」（二〇〇〇）は、沖縄人女性ゴゼイの話を通して、元日本軍「慰安婦」の問題をめぐる性差別、売春婦差別や、沖縄戦で日本軍が住民をスパイ視し、虐殺した歴史に焦点を当てた作品である。日本軍への忠誠心を証明するために、沖縄出身の将校や兵士がその残虐的な暴力に加担したことも描かれる。

目取真によるこれら二つの小説では、沖縄の方言が使われ、漢字の当て字にふりがなをつけてその発音を示している。たとえば、「群蝶の木」で、外来者であったゴゼイは、戦後、日本軍の慰安所になっていた旅館の主人や、村の世話役をしていた男性に執拗に頼み込まれ、米兵相手の売春旅館で働くようになった。ゴゼイが五十年後に当時のことを思い出す場面では、「我（わ）んが哀（あわ）れお前達（いったー）が分かるんな？　若い警官は前を向いたまま返事もしない。不良米兵から部落の婦女子を守るから協力してほしい？　何で、あんたらは戦争に負けたんじゃないね」といったように、ゴゼイが実際にあの二人に向って発された言葉は方言で表記され、口にしなかった彼女の心境が日本語で表現される。「魚群記」の英訳では、方言の部分が口語体に翻訳されている一方、「群蝶の木」の場合はイタリック体で表記され、日本語のテキストと区別されている。だが、英訳では、残念ながら原文のように、沖縄の方言が異質的な「声」として日本やアメリカの暴力に直面した沖縄の重層的な差別や、込み入った加害／被害関係を浮き彫りにすることができていない。

崎山多美の二つの作品は、過疎化のために共同体が解体し、伝統が継承されなくなる離島の現実を露呈することによって、日本からのオリエンタリズム的な視線や、沖縄の男性中心主義に抵抗する。「シマ籠る」（一九九〇）では、元婚約者の出身の島（小浜島）を訪ねた主人公高子が、元婚約者の母親で、一人で家と村の祭りの系譜を継続させようと奮闘する長崎出身のトキが、病気とアル中に蝕まれていることを発見する。トキから伝統芸能の踊りを学ぶうちに、高子は、狂気して亡くなった祖母の暗い記憶によって遠ざけてきた故郷O島（西表島）が、すでに自分自身の一部になっていることに気づく。小説では、祭りの衣装、音楽、踊りなどをめぐる方言の語彙は、日本語読者が理解できるように説明される。たとえば、イニノゥリ節の踊りの場面は、万葉集の国見の場面を引き合いに出しながら、その振り付けの象徴する意味を説明する。英訳では、万葉集に関する注釈が加えられ、重層的な文化の翻訳が行われる。

「ゆらていくゆりていく」（二〇〇三）は、保多良島という架空の島を舞台としている。島の血筋を受け継ぐ男性は丁重に扱われ

る一方、男たちを支えた女性は過労のため早く亡くなったり、セックスや子供を産み育てることに意義を実感できなくなったりする。人口が減っていく一途で、滅びゆく島の危機を前にしても、八十歳から百三十三歳までいる島の男たちは、何ら対策を講じようとする気力もなく、仲間同士で昔の情事話に花を咲かせる日々を送っている。

小説における葬式、踊り、妻問い婚、夜這いなどの風習をめぐる民族誌的な記述は、旺盛な生命力をもつプリミティブな文化、というステレオタイプを見事に裏切って、再生できなくなる島の現実を暴く。さらに、「だそうだ」「というのだ」など根拠のない伝聞のような語尾や間接話法が使われるほか、島言葉、畳語や擬声、擬態のオノマトペが頻繁に出てくるという文体を特色としている。たとえば、女性の霊による踊りは、「あれよあれよというまに膨らみだし水の上を滑りだし、滑りつつ、ぷくっ、ぷっくん、ぷくっ、ぷっくん、と意志のあるもののように水上から浜辺へのぼって来る、というのだ」と描かれる。英訳では、表音文字のローマ字で擬声語を再現することができるが、擬態語が動詞に置き換えられてしまうと、原文のリズミカルで流動的な文体と語りが再現できない。

詩の部分ではまず、米軍基地の占領に置かれてきた沖縄の負担を表すトーマ・ヒロコの「背中」（二〇〇五）と、沖縄にもたらされた近代の日本語に対峙する清田政信の内面を描いた「内言語」（二〇〇一）が訳されている。また、上京した沖縄出身者の二つの詩作で、故郷へ思いを寄せる摩文仁朝信（まぶにちょうしん）の短歌三首（一九一〇）と、何度も世変わりした沖縄の歴史を顧みて、その日本復帰を願う山之口貘の「沖縄よどこへ行く」（一九六四）の英訳も収録されている。摩文仁朝信の短歌の英訳は、視覚的にも音律的にも五七五七七の定型を再現しようと試みている。三つの近代詩の方は、日本語の日常語を、日本復帰や米軍占領の状況に対する沖縄の抗議、内省などの文脈で使う形でポエジーが発揮されるので、直訳でも詩が再現できている。

本書の最後に収録された知念正真の戯曲「人類館」（一九七八）は、一九〇三年に大阪で第五回「内国勧業博覧会」が開かれた際に起こった「学術人類館」事件[3]に基づく作品である。登場人物は、日本からの差別と圧迫に加担する沖縄出身の調教師、調教師の前で屈従の態度を取る沖縄の男性、遊女出身の沖縄の女性の三人である。場面の切り替えで、三人が異なる役を演じ、沖縄の方言による言葉遊びで、民族差別、同化教育、戦争動員、集団自決、日米安保など、沖縄に対する日本国家の差別や圧迫を批判する。

この戯曲で特徴的なのは、アイロニーである。たとえば、調教師が沖縄の女性に、「日本の防波堤になって」アメリカ館の黒人の性欲を満たすように要求し、「お国の為、引いては天皇陛下の御為

……」と言う途中、沖縄の男性は「ファッークスゥ！」とクシャミをし、女性は「（間髪を入れず）糞喰（クスク）エーヒャー！！」と、沖縄でくしゃみをした人に声をかける言葉を言う。それに対して、調教師が「くしゃみする事まで他府県の通りにする」と発言した近代沖縄の知識人を演じ、二人を叱責する。「ファッークスゥ」と「糞喰（クスク）ェー」など沖縄の方言と日本語、英語の語呂合わせによって、「極東アジアの平和と安全」、日本国家、天皇などの大義名分で行われてきた沖縄の女性への暴力を批判する。三つの言語を使い分ける工夫は示されているものの、英訳では語呂合わせやそれによるアイロニーを再現するのが難しい様子もうかがえる。たとえば、終盤で沖縄戦の戦場で三人が沖縄の方言で話す場面がある。英訳では、英語の読者が理解できるように翻訳されるが、原文のように、日本語の観衆や読者には理解できない言葉としての沖縄方言を突き詰めるラジカルさが失われてしまう。「学術人類館」の事件に象徴されるように、日本は、西洋の白人による帝国主義的で差別的な視線[4]を意識しつつ、自国の少数民族やほかの有色人種をさらに差別することで、近代の「文明」国家としてのアイデンティティを構築してきた。その意味では、沖縄の文学を英訳し、英語圏の読者に届ける本書は、「他者の言葉」を伝える使命とその限界を呈示し、考えさせる越境の実践だといえよう。

注

（1）Steve Rabson, ed., Okinawa: *Two Postwar Novellas*, Berkeley: Center for Japanese Studies, 1989.

（2）Michael Molasky and Steve Rabson, ed., *Southern Exposure: Modern Japanese Literature from Okinawa*, University of Hawai'i Press, 2000. Frank Stewart and Katsunori Yamazato ed., *Living Spirit: Literature and Resurgence in Okinawa*, University of Hawai'i Press, 2011 (summer 2011, issue of *MANOA*).

（3）アイヌ、台湾高砂族、沖縄人、朝鮮人、清国の人、インド、ジャワ、バルガリー（ベンガル）、トルコ、アフリカなど合計三十二名の人々が、民族衣装姿で日常生活を見せる展示を行ったが、沖縄出身者や、朝鮮、中国の留学生の抗議を受け、中止された。

（4）一八八九年にパリで行われた万国博覧会を始め、有色人種の展示が行われていた。